

## 話題85 ティータイム(12) 「生き甲斐」

思い出の患者さんです。いつも笑顔を絶やすことのない、さわやかなお婆さんでした。胸のレントゲン写真上の異常な陰影で紹介されてきたのです。肺がんを疑われての受診でした。幸いにも、精査の結果は悪性の病気ではなかったがため、その後、10数年、外来で経過を追っていくことになりました。

個人情報には厳しい時代ですが、あえて名前を記録し、記憶にとどめておきたいと思います。尊敬するお婆さんです。患者さんの名前は、中村 文さん。ご主人を先の大戦で亡くしました。戦争から帰ってきた弟さんは、爆風でもって視力を失っていました。戦後、文さんは、沖縄の視覚障害者のために、その生涯を尽くしたのです。

98歳、点字のボランティアの帰り道で転んでしまって手を骨折。その後、目に見えて体力が衰えていきました。100歳になったある日のこと、文さんら「自分史」を頂戴しました。「視覚障害者の手となり足となりて—中村 文の百年—」がそのタイトルです。表紙の裏の一行に、すべてが表現されていました。

「生きる意欲は、自らの内部からひとりでの生まれるのではなく、それを期待して待っている人の存在によって引き出されるのではないか」と記してあったのです。笑顔を絶やすことのない、文さんの人生の集約に、灯りが見えてきたような気がした。

「生きる意欲は・・・」。

無我夢中で走り続けて、定年を迎えた。やれやれ、しばらく、のんびりと、・・・とこれまでに振り返ってみようかと考えていた、その矢先。小学校1年生になったばかりの孫娘の一言。「爺ちゃん、毎朝、学校まで送ってちょうだい」。

のんびりと構えている暇はない。さてと、孫の成長を見届けながら、患者さんとの付き合いを続けて行こう。孫も、患者さんも、それを期待して待っているのだから。